

PVC Award 2023 受賞作品決定！

2023年12月20日
塩ビ工業・環境協会

「生活を豊かにするPVC製品」をテーマとして、PVC(塩ビ素材)の特長を活かして、機能を付与した魅力ある製品を公募し表彰するコンテスト“PVC Award 2023”の受賞作品を発表いたします。

PVC Award 2023 の狙いと審査結果

- PVC Award 2023 は、PVC(塩ビ素材)の特長及び機能性を活かして、生活の利便性向上や、環境配慮・リサイクル・安全・防災など社会のニーズに応える新しい製品を創造し、市場の活性化を促すことを目的として、塩ビ工業・環境協会が、日本ビニル工業会、日本ビニール商業連合会、日本プラスチック製品加工組合連合会と共同で主催しました。
- 発売から5年以内(2018年7月1日以降に上市された製品)のPVC製品および2024年12月までに商品化を予定している製品を対象として募集、2023年7月1日～9月30日の応募期間に、64点の応募がありました。
- 12月4日に審査会が開催され、受賞作品が選ばれました。大賞は残念ながら該当作品がありませんでしたが、準大賞(副賞50万円)1点、優秀賞(同10万円)4点、特別賞(同5万円)3点、入賞(同2万円)5点が選ばれました。
⇒次頁以降で紹介します。
- 今回のAwardでは豪雨被害の軽減を目的としたものが複数受賞し、昨今の災害激甚化への備えを主眼に置いた作品でも塩ビ素材が貢献し得ることを再認識できました。

表彰式および展示会のご案内

- 表彰式は2024年2月6日(火)11時より、六甲ビル2階会議室で行います。
- 展示会は2回に分けて東京と名古屋で行う予定です。
東京会場:2024年3月2日(土)～11日(月)
GOOD DESIGN Marunouchi(千代田区丸の内3-4-1 新国際ビル1F)
名古屋会場:2024年4月9日(火)～11日(木)
ウインクあいち(愛知県名古屋市中村区名駅4-4-38)

オーディエンス賞の設定について

- 前記2回の展示会にお出でいただいた方に展示作品の人気投票を行っていただき、受賞作品を除いた上位数点を「オーディエンス賞」として表彰する予定です。
- オーディエンス賞受賞作品は、4月中旬以降、塩ビ工業・環境協会ホームページ等で公開する予定です。

PVC Award 2023 受賞リスト

1. 準大賞(1点)

「エスロン大型建物用雨とい 超芯 V-MAX」 積水化学工業株式会社 小川 功

2. 優秀賞(4点)

①「芯が見えるボール hinomarc.(ヒノマール)」 AtoKA(アトカ) 葛山 真司

②「スリム内副管マンホール継手」 前澤化成工業株式会社

③「CELL ワインバッグ」 株式会社河野プラテック 河野 修一郎

④「車両水没防止カバー COVO」 有限会社マルゴオートサービス 池戸 賢一

3. 特別賞(3点)

①「機能性装飾義手」 株式会社佐藤技研 佐藤 泰斗

②「軽トラ積載給水タンク アクアテナー」 株式会社ナショナルマリンプラスチック 我妻 広江

③「PAPER JACKET flex」

バタフライボード株式会社

竹野株式会社

4. 入賞(5点)

①「サラリアシリーズ」 アキレス株式会社 山川 元

②「Bloom lampshade series(ブルーランプシェードシリーズ)」

有限会社アスポ 雨宮 史郎

森松株式会社 牧野 光昌

③「キャップモタナ〜い」

森松産業株式会社 橋野 徳明

④「Kdome(ケードーム)」

株式会社ナショナルマリンプラスチック 鈴木 守

⑤「アップサイクル丸洗い犬の散歩バッグ」

株式会社コロニーファクトリー

審査基準

- ・テーマ(「生活を豊かにする PVC 製品」との整合性)
- ・市場性: 市場の規模・売上・伸び等実績、潜在市場獲得力があるか
- ・機能性: PVC 素材の特長が活かされ、機能性を有する製品であるか
- ・独創性: 新規性や創造的な発想・表現がデザインされているか
- ・環境・社会貢献度: リサイクル、健康、防災、省エネなどへの貢献

審査員

芝浦工業大学 デザイン工学科 教授 橋田 規子氏

日刊工業新聞社 論説委員・編集委員 山本 佳世子氏

一般社団法人 日本住宅リフォーム産業協会専務理事 北方 寛氏

日本ビニル工業会会長 伊藤 守氏

日本ビニール商業組合連合会会長 勝山 正昭氏

日本プラスチック製品加工連合会会長 川村 浩高氏

塩ビ工業・環境協会理事 村田 恒氏

○受賞作品の概要

準大賞（1点）

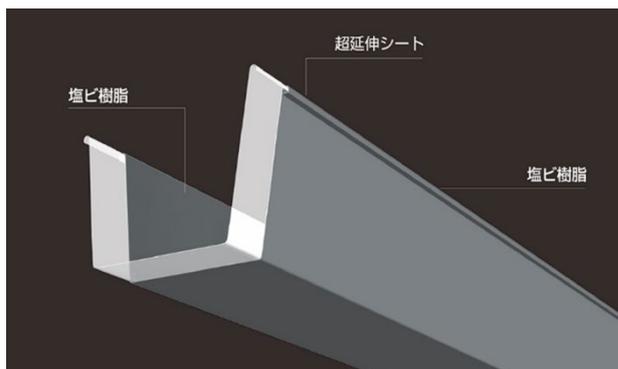
作品名：エスロン大型建物用雨とい 超芯 V-MAX

受賞者：積水化学工業株式会社 小川 功



（アピールポイント）

PVCをポリエステル系超延伸シートの両面に積層した構造で構成される業界最大級の大容量雨といです。近年のゲリラ豪雨頻発で洪水や建物内への浸水被害が増加し、雨水排水のための軒といの大型化のニーズは年々高まっています。また、大型建物用の軒といは既製品がなく、金属製のといを職人が現場に合わせて加工する必要がある一方、職人人口が減少する昨今、止水処理品質の均一化や施工の省力化が課題となっています。本製品は業界で初めて大容量の塩ビ雨といを既製品発売（標準化を目指す）、同時に排水能力拡大による建物の維持、省施工化での工数削減で、職人不足という社会課題の解決に貢献します。



（講評）発想が新しく、チャレンジングであるという点で準大賞に値する。薄い多層押し出しは技術的に難しく、昨今の豪雨対策のみならず、軽量化・長寿命化の実現にも高い評価が与えられました。

優秀賞(4点)



作品名: 芯が見えるボール

「hinomarc.(ヒノマール)」

受賞者: A to KA(アトカ) 葛山 真司

発想が新しく、難しい加工を克服した点が評価されました。



作品名: スリム内副管マンホール継手

受賞者: 前澤化成工業株式会社

楕円形の押出成形は技術的に難しく、地味ながら安全面への寄与が評価されました。



作品名: CELL ワインバッグ

受賞者: 株式会社河野プラテック

河野 修一郎

本製品は塩ビ素材の特長(彩色性と透明性、ウェルダ加工性)が活かされているうえに、デザイン性も高く評価されました。



作品名: 車両水没防止カバー COVO

受賞者: 有限会社マルゴオートサービス

池戸 賢一

PVC 素材の良さが活きており、災害面での活用を評価されたほか、多くの審査員が面白いとのご意見で、家財にも適用できるのでは?といった意見もありました。

特別賞(3点)



作品名:機能性装飾義手

受賞者:株式会社佐藤技研 佐藤 泰斗

耐久性のある塩ビ製でシリコンゴム製並みのリアルさを実現し、リアルさと耐久性を両立できたことが評価されました。



作品名:軽トラ積載給水タンク アクアテナー

受賞者:株式会社ナショナルマリンプラスチック
我妻 広江

身近な軽トラックを活用して被災地域に70人分の飲料水を届ける試みが評価されました。また近年の気候激甚化に対応する製品としても評価されました。



作品名:PAPER JACKET flex

受賞者:バタフライボード株式会社
竹野株式会社

塩ビのウェルダ加工性を活用し、マグネットの存在を感じさせないシンプルなデザイン/形状が評価されました。

入賞(5点)



作品名:サラリアシリーズ

受賞者:アキレス株式会社 山川 元

単なる工場端材のアップサイクルではなく、特殊なウェルダ―設備を活用して、可能な限り縫製や他素材の使用を抑えた点が評価されました。



作品名:Bloom lampshade series

(ブルーランプシェードシリーズ)

受賞者:有限会社アスポ 雨宮 史郎

森松株式会社 牧野 光昌

デザインの意匠性が高く評価されました。



作品名:キャップモタナ〜い

受賞者:森松産業株式会社 橋野 徳明

シート打ち抜きというシンプルな構成／デザインが評価され、キャップが落ち難く高齢者向けにも需要があるとの意見もありました。



作品名:Kdome(ケードーム)

受賞者:株式会社ナショナルマリンプラスチック

鈴木 守

アップサイクルであること、軽自動車という身近な存在を災害時に活用しようというコンセプトが評価されました。



作品名:アップサイクル丸洗い犬の散歩バッグ

受賞者:株式会社コロニーファクトリー

単なる工場端材のアップサイクルではなく、特殊なウェルダ―設備を活用して、可能な限り縫製や他素材の使用を抑えた点が評価されました。

○審査員の講評

芝浦工業大学デザイン工学科教授 橋田 規子

「本年の受賞製品は、塩ビのタフで信頼のおける特質を活かした、水害対策系の製品が多かったと思います。

準大賞は多層成形の大型雨どいで、技術的に難しい成形を達成し、軽量になることで施工の負荷が減らせる点が良かったと思います。また、優秀賞の楕円形にすることでスリムにした内副管マンホール継手はとても明快な解決策でした。大切な愛車を水害から守る車両水没防止カバーは大変良く、さらに一人ですらできるとより良くなると思います。

デザイン性では優秀賞のワインバックがとてもキュートで見ているだけで楽しくなるデザインです。またキャップモタナーいはシートのカットのみでできる面白い作品でした。

今年は応募総数自体が少し減少したようですが、来年はたくさんの応募をお待ちしています。」

日刊工業新聞社論説委員・編集委員 山本 佳世子

「本審査の審査委員の顔ぶれは多様です。外部委員の場合はデザイン性を重視したり、一般人にとっての使い勝手や環境意識を考えたりして、評価をします。

対して、業界のプロフェッショナルの委員の場合は、「他に同様のものがない、新しい発想に基づくものか」「技術的に難しいところに挑戦したものか」といった観点で、応募作品を見えています。こういった複数の切り口でアワードを議論することは、楽しく充実した活動といえます。

けれども近年は残念ながら、どの観点でも高得点だったり、観点は一部であっても飛び抜けて魅力的だったり、という大賞となる作品が出ていません。

ポストコロナで様々な活動が動き出していますが、社会は以前と同様ではない新たなステージに入っています。そのエポックを感じさせるような大賞候補が出てくることを、次回は期待したいと思います。」

以上